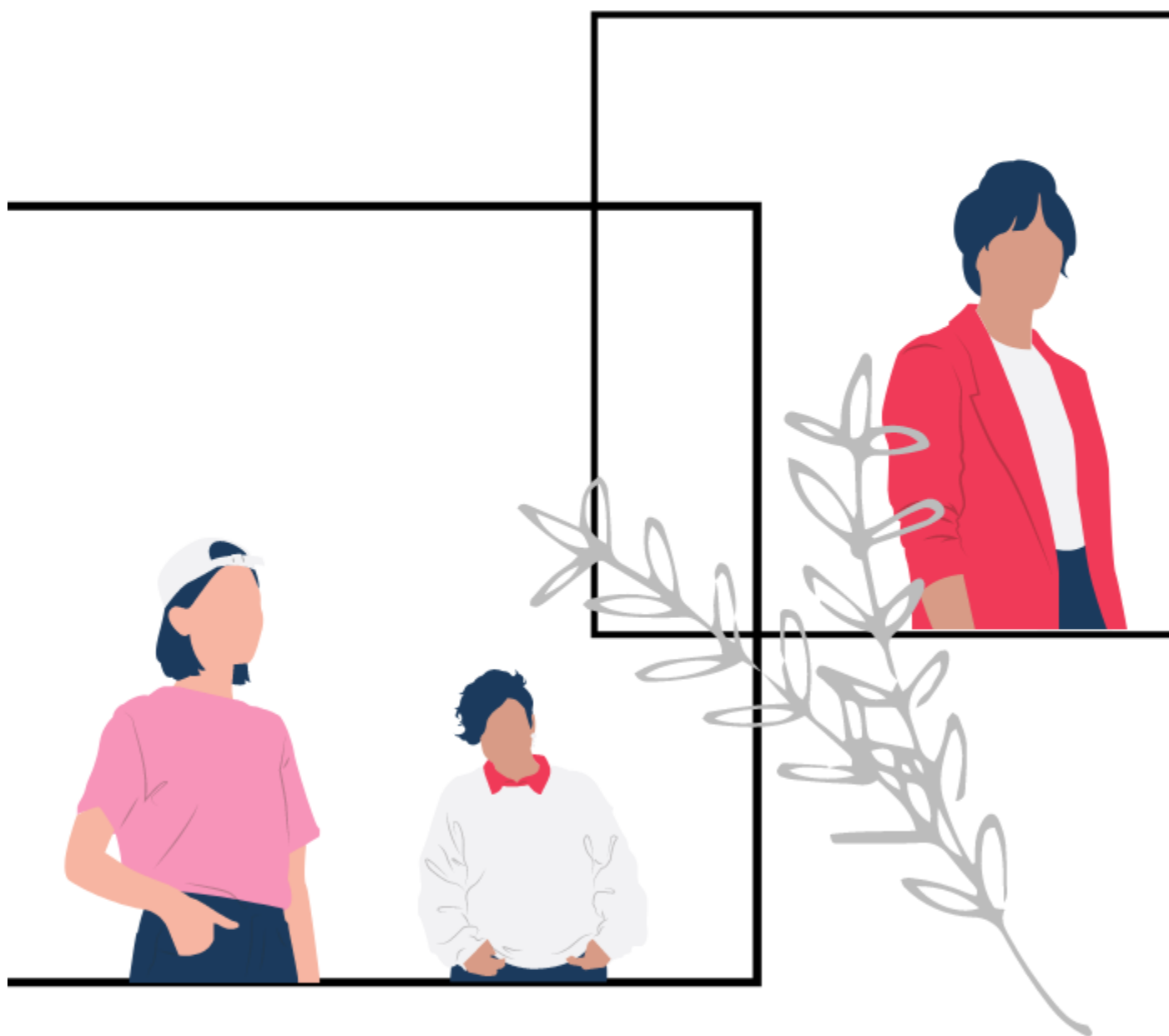


外国につながる第二世代の
横浜市若年女性インタビュー

調査報告書 【Web概要版】

2022年 3月



男女共同参画センター横浜南

目 次

はじめに	1
第1章 調査の概要	2
1 取組の流れ.....	2
2 背景と対象者の検討	3
3 本年度調査の目的.....	4
4 調査対象者の設定と募集	4
5 インタビュー調査の概要.....	5
6 回答者のプロフィール.....	6
第2章 当事者の語りから読み取る.....	8
1 当事者が語る困難.....	8
2 解決に向けて必要なこと	19
第3章 見えてきた課題と今後に向けて	24
1 インタビューを終えて.....	24
2 本調査で見えてきたこと	26
3 今後に向けて～私たちにできること.....	29
資料.....	30
・参考文献	
・外国人女性 インタビューの流れ [質問項目]	
・インタビュー同意書	

はじめに

～外国にルーツを持つ女性の生活課題・ニーズ把握と地域社会の変容に向けて～

横浜市では 1990 年代、外国人人口の増加を受けて『横浜市外国人女性の生活実態調査』が行われた(1997 年、横浜市市民局女性計画推進室)。100 名ほどの多様なエスニシティの女性にヒアリングした調査報告書では「日本社会からの阻害」「不平等な扱い」があり、「外国人女性の生活の安定には、地域社会、市民の側が異文化を理解し人権を尊重しあう社会づくりのために、家庭、地域、学校、職場など様々な角度からジェンダーの視点に立った啓発や交流の機会の充実が必要」との提言が出されていた。

それから四半世紀たった現在、横浜市の外国籍住民登録者数は 10 万人を超え、「外国人材の受入れと多文化共生」は市の重要施策となっている。市の中心部では下町の商店街で、公園で、色々な言語が聞かれるようになった。小・中学校には日本語を解さない子どもたちが増え、外国人の母親へのサポートが必要とも聞く。変化に呼応して、各区の国際交流ラウンジや市民による学習支援教室等の活動も活発になっている。

横浜市男女共同参画第 5 次計画(2021-2025)においても、施策 5「困難を抱えた女性への自立支援」には〈様々な困難を抱える外国人女性・母子等に対する支援の充実〉が掲げられた。男女共同参画センターにおいても、外国にルーツを持つ女性の生活上のニーズ把握のための調査や、センターで実施する事業や提供する情報・サービス等において多様なルーツをもつ住民を包摂できるような設計が求められている。

男女共同参画センター横浜南では、これまで社会的経済的に困難を抱える女性を対象に就業支援等の事業、情報サービスや場を提供してきたが、センターが位置する南区をはじめ市中心部の地域には外国につながる女性や子どもたちが急増した。国際結婚や不安定な在留資格、子育てや介護の担い手として、あるいは労働者として、女性特有の課題は外国人にもあると思われる。仕事や暮らしの状況について、また受入れ側である地域社会の今後のあり方について課題を把握するため、本調査を実施することとした。

1 年目(2020 年度)の予備調査では、検討委員をまじえて設計を行い、外国人支援を行ってきた団体や個人を対象にヒアリングを行った。2 年目(2021 年度)の本調査では、支援団体から紹介を受けた当事者の 20 代女性 11 名にインタビューを行い、それらの語りから大きな示唆を得た。すでに第二世代になり、日本国籍取得者が少なくない中でも、地域社会に起因する困難が根強くあった。その中で生きていく彼女たちの強さがあった。

ご協力いただいたすべての団体、方々に御礼申し上げる。本報告書が、地域社会にどんな変容が急がれているのか、私たちみなで考え、語られた声に応えていくための一助となれば幸いである。

第1章 調査の概要

1 取組の流れ

2か年にわたる本調査の流れは、次のとおりである。

■2020 年度 予備調査		
	検討会	調査活動
2020 年 8 月	第 1 回検討会 「調査目的の確認、および支援団体ヒアリング先と項目について」	先行調査の収集・検討
10 月～ 2021 年 1 月		◎支援等関連団体へのヒアリング (6 件)
2 月～3 月	検討委員への個別ヒアリング 「支援団体インタビュー結果の分析、 次年度調査方針・方法の検討」	インタビュー記録および結果概要の とりまとめ
■2021 年度 本調査(インタビュー調査)		
2021 年 5 月～6 月		インタビュー調査の設計 対象者の募集・決定・調整
2021 年 7 月～11 月		◎対象者へのインタビュー (11 件) インタビューレポート作成
12 月	第 2 回検討会 「インタビュー調査報告、ご意見聴 取、報告書内容の検討」	
2022 年 1 月～3 月		◎調査報告書作成

【検討委員会 委員】

※敬称略

中村 暁晶（公益財団法人横浜市国際交流協会 なか国際交流ラウンジ 館長）

長谷部美佳（明治学院大学教養教育センター 准教授）

栗原 渉（横浜市政策局男女共同参画推進課 担当課長）

菊池 朋子（公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会 事業本部長）

2 背景と対象者の検討

～予備調査から見えてきた、第二世代の若年女性たちの存在～

2020 年度の予備調査では外国人女性をめぐる生活や仕事、健康の課題について、日頃からかかわりをもっている次の団体に当センターの職員が出向き、ヒアリングを行った。

【ヒアリング先(団体)】

- ・横浜市健康福祉局 高齢健康福祉課
- ・公益財団法人横浜市国際交流協会 横浜市多文化共生総合相談センター
- ・特定非営利活動法人 移住者と連帯する全国ネットワーク
- ・神奈川県勤労者医療生活協同組合 港町診療所(産婦人科医)
- ・医療法人ことぶき共同診療所(心療内科医)
- ・カトリック藤沢教会・救急の会(代表 ボランティア相談員)

ヒアリングの結果、外国人女性の前に立ちはだかる重層的な「壁」の一つとして、第二第三世代である若年女性のアイデンティティ形成や自己肯定における困難が浮かび上がってきた。このことは男女共同参画センターが支援事業を行ってきた働きづらさに悩む若年女性の対象層と共通していると感じられた。自分の意志で渡日したのではない第二世代の若い女性たちは日本で育ちながら、アイデンティティの葛藤やメンタルヘルス、仕事上の課題を抱えており、そこには日本社会のジェンダー不平等や差別がなんらか影響しているのではないかと推察されたのである。

ヒアリング先のある団体理事は、「在日移民女性の経験には、日本社会のジェンダー不平等や差別が刻印されていると感ずることがある」(We learn 2020. 10 巻頭言)と書いている。日本で生まれ育った、外国にルーツをもつ女性にも日本社会のジェンダー不平等や差別が影響しており、アイデンティティの葛藤がある。それだけでなく、第一世代(彼女たちの母の世代)との心理的距離感や第一世代のようにならない自身への負い目があるのではない。そのような見方も、別の団体で聴き取った。

しかし、自ら言わなければ外国にルーツがあるとは見られないこともあり、公的なサービスも受けづらくなっているのではないかと。そこには可視化されていない層としての生きづらさがあり、社会的排除が起きてはいないだろうか。そこで2年目の本調査では、外国につながる第二世代(20～30代)の女性を対象にしぼり、インタビュー調査を実施することにした。

3 本年度調査の目的

本調査の目的は第一に、横浜市内に住む、外国につながる第二世代の女性の生活状況、直面している課題や困難、ニーズを把握することと、彼女たちの生きづらさが軽減され、包摂されるような望ましい地域社会のあり方を考えることである。

さらに、外国につながる第二世代の女性に対して、市内の公的社会資源とのかかわり、あるいは横浜市男女共同参画センターの利用の可能性を探ることもできればと考えた。

4 調査対象者の設定と募集

(1) 調査対象者の設定

対象者は2で述べた経緯により「外国につながる第二世代(20～30代)の女性」と大枠を設定した。さらに具体的には「横浜市内で生まれ育ち、あるいは、横浜市内に在住している(途中転居した者も含む)、外国につながる第二世代(20～30代)の女性」とした。ここで外国につながる第二世代とは、外国または日本で生まれ、どちらかの親が外国ルーツであり、10代までに親と共に日本に定住開始をした者と私たちは定義した。

人数は、多様なエスニシティと背景をもつ10人程度を想定した。

(2) 調査対象者の募集

2020年度予備調査のヒアリング先を含め、以下の支援団体や支援者にインタビューを受けてくれる方の紹介を依頼した。紹介された方の中でインタビューを承諾された方に対して、質問項目と同意書をあらかじめ提示した。

ここで外国人の子どもを対象とした複数の学習支援団体に新たに依頼したのは、女性(母親)を支える支援団体ではなく子どもを支える団体に依頼したほうがこの場合は対象者に出会えるだろうという助言を、女性シェルターで長く女性支援を行ってこられた方から受けてのことだった。

【協力団体】

- ・公益財団法人横浜市国際交流協会 なか国際交流ラウンジ
- ・医療法人ことぶき共同診療所
- ・認定NPO法人多文化共生教育ネットワークかながわ(ME-Net)
- ・わたぼうし教室 横浜
- ・ユッカの会
- ・ART LAB OVA アートラボ・オーバ
- ・カトリック末吉町教会

5 インタビュー調査の概要

(1) 目的

横浜市内で生活する外国につながる女性第二世代の生活課題とニーズを把握し、望ましい地域社会の在り方を考えるものとする。さらに、市内の公的社会資源へのつながりの必要性、あるいは横浜市男女共同参画センターの利用者層としての可能性を探る。

(2) 調査対象

横浜市内に住む、外国につながる第二世代(20～30 代)の女性 11 人
(シングルかどうか、エスニシティ・国籍 は問わない)

(3) 調査実施期間

2021 年 7 月～11 月

(4) 実施方法

直接またはオンラインによる 90 分程度の面談とし、必要に応じて支援者の同席を得た。
質問と記録は、主としてインタビュアーが担当し、協会スタッフが同席した。

(5) 調査者

- ・ インタビュアー
飯島裕子氏 (ノンフィクションライター、東京福祉大学社会福祉学部非常勤講師)
- ・ 男女共同参画センター横浜南 職員
小園弥生(館長)、石山亜紀子(管理事業課長)、和田朋子(担当職員)

(6) 調査項目

- プロフィール (年齢、国籍や在留資格、婚姻、就業形態、住まい等)
- 来日の時期と経緯 (親の選択)
- 使用言語、日本語の習熟度
- 学校や職場の選択
- 現在の状況 (健康状態、仕事、家族との関係等)
- 主な困りごと
- 将来の希望
- 今後に向けての提案 (男女共同参画センター、地域社会に対して)

(7) その他

聞き取った内容は個人が特定されないよう加工し、本人の了解を得てここに掲載した。
個人のライフヒストリーはインターネットでの公開はしないこととした。(資料一同意書 P. 34 参照)

6 回答者のプロフィール

回答者 11 人のプロフィールをまとめると、次のとおりである。

○年齢

- ・ 20 代前半 6 人、20 代後半 5 人（最低 20 歳、最高 29 歳、平均 24 歳）

○国籍・在留資格とルーツ国

- ・ 日本国籍：5 人（フィリピン 3 人、タイ 1 人、ベトナム 1 人）
- ・ 永住者：4 人（中国 2 人、韓国 1 人、日系ペルー 1 人）
- ・ 家族滞在：2 人（中国 1 人、フィリピン 1 人）

○来日時期

- ・ 日本生まれ：4 人
- ・ 就学前年齢：1 人
- ・ 小学生年齢：3 人
- ・ 中学生年齢：3 人

○親の来日と本人

- ・ 親が日本で定職を持ち、家族一緒に日本で暮らすことを選択：5 人
- ・ 親が来日し、本人がある程度成長してから日本に来日（呼び寄せ）：2 人
- ・ 母親が来日し、日本人の父親と結婚して本人が出生：4 人

※日本における生活のスタートは、本人に選択の余地はなく、親世代の選択によるものであり、その後の人生を規定する最初の大きな要因となっている。

○学歴

- ・ 日本の高校中退：1 人
- ・ 日本の高校卒：1 人
- ・ 日本の大学に在学中：1 人
- ・ 日本の大学・大学院卒：5 人
- ・ 日本以外の大学・専門学校卒：2 人
- ・ 日本の専門学校卒：1 人

○就業状況

- ・ 正規職：4 人（総合職 2 人、医療サービス、保険営業）
- ・ 非正規職：6 人（飲食・小売医療サービス 4 人、英会話講師、公益法人）
- ・ その他：1 人（大学生）

○婚姻

- ・未婚：7人（うち子どもあり1人）
- ・既婚：4人（うち子どもあり2人）

夫の出身国：同国：2人、他国：1人、日本：1人

○同居状況

- ・一人暮らし：1人
- ・1世代同居：2人（夫と二人暮らし）
- ・2世代同居：6人（夫と子どもと：1人、両親と：2人、母と：1人、
両親ときょうだいと：1人、母ときょうだいと1人）
- ・3世代同居：2人（夫と子どもと母ときょうだいと、両親と子どもと）

○住まい

- ・持ち家：5人（うち3人は親の持ち家）
- ・賃貸：6人

第2章 当事者の語りから読み取る

本章では、インタビューで聞きとった語りの中で、彼女たちの困難とその困難の解決に向けて必要と思われることを次のテーマで分類し、テーマごとにその具体的な本人の語りを要約して挙げている。

1 当事者が語る困難

(1) 日本語の壁

10代になって日本に呼び寄せられた子どもにとって、日本語の習得が難しいことは最初の最も大きな壁である。

編入した学校では、授業がわからない苦痛とともに、日本語がうまく話せないことによる気後れや自信のなさ、孤独感を抱えている。来日前には快活だった自分が、自分らしさが出せない状況に陥る苦しさ語られている。

日本語の壁は、進学や就職にも不利に働き、進路を選択する可能性も限られていく。自らが親となり、母国語を使う環境で子育てに入ると、日本語の壁が子どもへと持ち越されていっている状況もみられる。

●思春期に呼び寄せられて

- ・当初は授業に参加しても何もわからないまま、それでも座っていなければならず、とても苦痛だった。国際教室で日本語を教えてもらうようになったが、ついていけない授業が多く、コミュニケーションが難しく、友だちはずっとできなかった。(10歳で来日)
- ・中学、高校とも部活や課外活動は一切やっていない。担任の先生から「まずは日本語習得が先」と言われたし、自分でも言葉が通じないのに楽しめるとは思わなかったから。
- ・来日前は学校で友だちも多かったが、日本ではまるでお人形さんのように、無言で反応のない子になってしまった。本来の自分自身ではないことが悲しく、悔しかった。もっと友だちとおしゃべりしたいが、聞くのに精一杯で、自分から話す余裕はない。耳が慣れてきても、自分から話しかけることがない、静かでおとなしいイメージを演じるしかなかった。(10歳で来日)
- ・母国では自分のことは自分でできる普通の中学生だったが、日本語がわからず、言葉を発することができなかった。数学の答えが分かっても、数字の言い方がわからず、日本人らしい発音もできず笑われるという恐れもあって手があげられなかった。声をあげない＝意思がないように受け止められ、文化祭でも大道具係しかできず、しかも何をやってよいかを聞くこともできなかった。すると「なぜ何もしないの?」というクラスメイトたちの白い目を感じ、戸惑いながらも自分の気持ちを伝えられなかった。(14歳で来日)

●進路の選択などについて

- ・成績の問題があり、中学卒業後は定時制高校へ進んだ。高校になってやっと授業が理解できた感じがした（10歳で来日）。
- ・高校卒業後は母国の4年制大学に進学した。主な理由のひとつは高校の成績では自分が望む日本の大学の学部への進学が厳しかったから。（14歳で来日）
- ・皆に認めてもらうには日本語を話すしかないと思い、日本語の勉強を頑張った。日本語ができなければ将来がないと思っていた。日本語は毎日勉強していたが、高校では休み時間にも勉強して、高1で日本語能力試験N1に合格。内申点もどんどん上がり、成績も学年トップとなり自信がつき始めた。それでも日本人には絶対に追いつけない。できて当たり前でようやくスタート地点。日本語と中国語、すごくできなくても半分ずつなら合わせて100になるかなと思い、4年制大学の日本語教育専攻へ進学することにした。（10歳で来日）

●職業の選択について

- ・日本では大学で学んだ知識を生かした仕事を探したが、日本語が出来ないことがネックになり、就職先が決まらなかった。外国人が仕事をするには、日本語能力試験N2以上またはネイティブレベルの日本語が必要になることが多い。
- ・日本語の読み書きや漢字ができないと、外国人が日本で正社員やオフィスワークなど安定した仕事に就くことは難しい。母も含めて日本で長く働いているのに、安定した仕事に就けない人は多い。友人は、ひらがなが書けるか、漢字が分かるかと面接で尋ねられて傷つくと言う。意味は分かるので、そのうち書き方も覚えられるに。（夫のように中途半端な年齢で日本に来ると、日本語の勉強が追いつかず正社員になることは難しい。）
- ・外国人の親は日本語ができないと労力を使う仕事しかないし、賃金が低いから家にいたくてもたくさん働かなくてはならない、というつらさがある。

●子どもへの影響

- ・長男は3歳児健診の時、言葉が遅れているため自閉症ではないかと指摘を受けた。夫はあまり日本語が話せず、家では母国語で話す。子どもたちは母国語と日本語と英語で育っているため言葉が遅れてしまっているのではないかとと思っているが、長男は現在、様子を見るため療育センターに通っている。
- ・（同居の）母が（私の）娘に母国語で話しかけるので、娘は日本語が不得手。外国つながりの子どもの居場所支援者に日本語と勉強をみてもらっている。

(2) 地域社会の壁

学校や職場、地域での差別や不本意な思い、経験が多く語られている。日本人の偏見や理解のなさに傷ついている。

「相談するという発想はない」「ひとりで頑張ってきたので人に甘えることは難しい」といった状況が多く語られた。

●学校で

- ・シャイな性格もあって日本語で話すことに苦手意識があり、中学、高校とずっと孤独だった。周囲とコミュニケーションが取れず、フラストレーションが溜まっていた。編入当初はクラスメイトも積極的に話しかけたり、世話を焼こうとしてくれたが、言葉が通じないことでそういう機会も減っていき、孤立していった。高校の時、同国人の友だちと母国語、英語で話していると、「なんで日本語が話せないのに日本にいるんだ」というようなことを言われたことがある。
- ・母国語で数を数えた友だちが、日本人の同級生の悪口を言っていると勘違いされ、呼び出されて暴力を受けた。本当にショックだった。「私がここにいることは誰からも歓迎されていない」「日本語が分からないのに日本人の場に入ってきてしまってごめんなさい」と思った。すべてに自信が持てなくなったのもこの頃。
- ・出産3か月後、中学に登校したら教室に入れてもらえず、体育祭や修学旅行にも行かせてもらえず、卒業アルバムにも写っていなかった。
- ・ハーフで目立つためか、中学では人の妬みを買うことがあった。メールのなりすましが流行り、私を装って他の子の悪口を言うメールが流れた。無実だったのに、担任の先生も信じてくれず、味方が一人もいない状況がつらく、半年ほど学校に行けなくなってしまった。

●職場で

- ・バイト先の飲食店で私の名札を見て「日本人と替わって」と言われることがある。高校の時日本語が下手だから仕方ないかと思ったが、大学院の時、「私、中国人嫌い」と大声で言う客があり、店中がシーンとなった。日本語教育を専攻し、日本語が上手になればこんな経験はなくなると思っていたのに。そこでこれは自分が悪いからではないと気づいた。こういう人は国籍に関わらずいるのだ、もう自分にプレッシャーをかけるのは止めようと思った。
- ・一番イヤな思いをしたのは高校生でアルバイトをしていた時。日本語を話せないと「なぜここで働いているのか?」「日本人と話したい」と言われることがあり、ショックだった。しかし仕方がない、こういう人はいるものだ、気にしないようにしようと思い、この時の経験で、どうやって他の人とやっていくかを学ぶことができたと思う。
- ・英語講師は、イギリスやアメリカのネイティブ講師はアジア系や日本人バイリンガル講師よりも給料がよく、公平ではない。日本では保護者も、アメリカやイギリスの講師を選ぶ。高校時代も生徒は白人の先生に惹かれていた。これは自分では受け入れなければいけないことだと思っている。小さい教え子たちはそんなことは気にせず、楽しめればいいという感じだが。

●地域で

- ・日本企業に長年勤めた父が正社員になれないのは差別ではないか。夫も工場のパート社員で非正規。外国人はいくら仕事ができても、見た目や名前でも外国人と分かれば正社員にはなれないのだと思う。外国人の雇用が安定することを望む。
- ・（外国人の）母の名前で家を借りようとする、かなりの確率で落とされてしまう。審査の段階で「外国人だからダメ」と言われたり、最初の段階でお断りされることも少なくない。これには強い違和感と怒りを感じる。
- ・（外国人の）母が日本語がよく分からないことを知って、母に PTA の役員を押し付け、役員になったら日本語が下手だと笑う人がいた、と最近になって母から聞いた。日本語が話せないのだからママ友の輪に入ってくるなという雰囲気もあったという。裕福な地域柄でハーフというと白人系。アジア系の人には優しくない雰囲気がある。
- ・夫は医師が言っていることは分かるが、どうせ分からないだろうと細かく説明してもらえないので、私もついていく。

●人とのかかわり

- ・大学4年になり、進路を考えた時、日本の会社に入って人と深くかかわりながら仕事をするのは怖いと思った。人間関係の部分で本当にできるのかなと。SNS は母国のサイトをみていた。日本の若者の興味やファッションの流行がわからず、そういった話ができないと関係づくりは難しいと思った。
- ・ひとりで頑張ってきたので、人に甘えることは難しい。日本に来てからずっと孤独を抱え、他人に悩みを相談することはなかった。
- ・悩みを相談できる人はいない。相談するという発想がない。自己完結型なので自分で考えて自分で決めるほう。子どもの時から母と教会に通い同国人コミュニティで親しくし、外国つながりの学生コミュニティでも活動していたが、学校も教会も進学や家の経済的なことなどを相談したり情報をもらったりするところではない。
- ・相談できる相手はいない。家族のことを人に話したくないという思いが昔から強い。どうやって人に甘えたり、頼ったらいいのかわからずにきた。ハーフにはそういう人、そして情緒不安定な人が多いと思う。でも、何も聞かずにおかずを差し入れてくれたり、そっと助けてくれる人、支えてくれる人がいてくれて、それはとてもありがたいことだと思っている。

(3) 情報の壁

日本の制度やシステムについて「外国人がもっている情報がとても少ない」ことが、進学や就業に不利になっている状況が語られている。今後の人生を切り拓こうとしても、「どこに相談したらいいかわからない」人もいる。

●情報の届かなさ

- ・母国では水泳の実技の授業がなかった。水着になるのが恥ずかしく、体育の授業を見学していたところ成績が1になり、高校受験にとても不利だと後で分かった。誰もそれについて教えてくれなかった。
- ・一般の入試を受けるために選んでいた学校は難しいので、外国人向け特別枠のある高校に変えようと先生から連絡があったが、それらの学校の違いが分からず、自分に合っているかどうかを考える余裕もなく、ただただ情報が不足していた。
- ・外国人はもっている情報がとても少なく、年金や育休ほか、いろいろな仕組みやシステムがあるのに知らされておらず、あることを知らない人が多い。保育園は仕事がないと入れないのに、どうやって仕事をみつけていいのかわからない。情報がないから友人の紹介でみつけることが多くなる。
- ・私の夫は日本語の問題があり高校は私立を勧められたが、聞かずに勉強を頑張り公立高校に進んだ。日本語ができない外国人の生徒が公立高校に進める制度や情報がもっとあるとよい。
- ・来日してから日が浅い人たちはいろいろな困りごとがあるが、支援の場所があることを多くの人は知らない。チラシを配布するなど、支援の情報などが必要な外国籍の人に広く行きわたるような工夫をぜひ行政にしていただけるとよい。

(4) 在留資格の壁

在留資格の不安定さは、来日した第一世代である親世代の苦勞のもと、第二世代の生活を不安定にさせている、家族滞在など就労時間に制約がある場合、生活の安定が得にくい。仕事を失えばビザも居場所も失う恐れがある。

在留資格の更新はさまざまな意味で負担が大きい。ビザの更新や変更に必要な情報は得にくく、何度も入管に書類を出し直すこともある。

●在留（定住）の不安定さ

- ・日本人なら仕事を辞めてニートになっても生きていくことができるが、私は仕事を失えばビザも居場所も失い、家族と離れ離れになってしまう可能性がある。いろいろな選択肢を持っておくべきだと思っている。
- ・母は 5 年ごとにビザを更新している。母は私が知る限りでも飲食関係や清掃の仕事などいろいろ。永住権を取るためにも一つの職場で 10 年ほど続けるほうが良いと考えて頑張っていたが、コロナ禍でシフトに入れなくなり、8 年働いた仕事を辞めざるを得なかった。結局、永住権も認められなかった。

●在留資格による就労の制限

- ・外国から呼び寄せた子どもたちは家族滞在ビザのため学生支援機構の奨学金を借りることができず、進学を諦めざるを得ない人も少なくない。就労も週 28 時間に限定され、アルバイトで学費を稼ごうにも足りず、親の仕事で大学の学費を捻出するのは困難。人生を変えるために頑張っても大学に行こうとしても自分でできることは限られている。
- ・ビザの種類により就労時間に制限があり長時間働けないから困っているということをよく聞きく。永住権が無いと住宅ローンも通りにくい。大学に行きたくても経済的に行けない子どももいると聞きく。こういうところはもう少し何とかなるとよい。
- ・父は永住権を取得したが、母と妹たちは家族滞在で週に 28 時間しか働けない。

●在留資格（ビザ更新）手続きと入管の対応

- ・一番不便なのはビザ更新。就職する際、家族滞在から就労ビザに変更する手続きが大変だった。入国管理局のホームページで下調べをし、書類を揃えて行っても、追加資料を求められるなど 3 回直した。就職の内定証明書は形式を問わないとあったが、週 28 時間以上働くことを証明する必要があることを知らなかった。働く時間と日数を書く必要があるなら最初から伝えてほしかった。就職 1 年目は就職ビザが 1 年しか出ないことも。相談できる人や頼れる人がいないことが一番つらい。来年また更新手続きをする必要があり気が重い。
- ・夫は日本の永住権を持つ私の配偶者として毎年ビザの更新をしている。子ども 2 人はアメリカ国籍で、日本のビザを更新しなければならず手続きが大変。子どもが生まれると新生児を入管に連れて行かなければならなかった。
- ・ビザ更新の知らせは来ない。自分でいつも気をつけていなければならない。

(5) 娘である自分の進学と結婚

娘の進学を応援する親が多いが、将来の活躍に期待して娘の教育機会を確保しているケースから、日本の教育システムがわからないなど、本人が自ら頑張らなければならないケースまで、親の関わりには幅がある。

恋愛や結婚も、本人同士を尊重する親が多いが、恋愛よりお見合いという母や祖母の価値観との葛藤も語られている。一方で、中学生で未婚の母になっても相手や相手の親（いずれも日本人）の責任ある対応が得られなかった状況も語られている。

●進学について

- ・親からは「女の子だから〇〇しなさい」と言われたことはない。今は女性も働くところはたくさんあるから、やりたいこと、好きなことがあれば積極的にやったらいいと、地方から東京の大学へ行くときも応援してくれた。
- ・両親は、母国の子どもがあまりに勉強して子どもらしい生活を送れていないので、余裕を持たせるために私たちに日本で教育を受けさせることにした。母国の大学進学率は100%に近く、首都にある大学でないと就職が難しいと言われており、みんなすごく勉強する。
- ・進学や就職などの相談を親にしたことはない。いつも決まった後に報告してきた。親は日本の教育システムがわからないのと、心配をかけたくないという意識が強かったと思う。そのことをつらいとか、もっと甘えたかったと思ったことはない。
- ・母は日本語が話せても宿題や勉強をみることはできず、日本人の父も勉強を教えるタイプではなかった。

●結婚や妊娠について

- ・両親から「何かしたい」と言ってダメと言われたことはない。両親の育て方や時代が女性を押さえつけることもないので満足している。「嫁役割」のようなものは自国にもあり、日本人との結婚にギャップを感じることはあまりなかった。国に関わらず、各家庭における習慣の違いは付きものだから。夫の両親も学生時代から二人が付き合っているのを知っていたので、結婚を反対されることはなかった。
- ・祖母は経済的に豊かな男性と結婚しろと言う。母は結婚までいかない恋愛は時間の無駄で、恋愛するなら中国に帰すと言う。母や祖母は同国人との見合い話を持ってくるが、それらの人は自分のやりたいことを頑張っている私とは価値観が合うとは思えず、断ると「自分を見なさい。あなたはかわいいの？ 人を選べるの？」と傷つくことを言う。一緒に暮らしていると考え方の違いでぶつかるため離れようと、今は一人暮らしをしている。
- ・中2で妊娠。子どもの父親は日本人の高校生。彼はお腹を蹴って「堕ろせ」と言った。DVも受けた。両親に話すと母は怒り、父は「お前の人生だからお前が決めたらしい」と言ってくれた。双方の両親と話し合い、彼の両親に「生まれたら認知する」と言われたが不履行である。

(6) 親や家族とのかかわり

来日した第一世代である親が日本語を習得しておらず、第二世代の本人が通訳として頼られているケースは多い。そのため負担感も抱えながら妹や弟の世話役割も果たしている。

親世代に生活困難な状況がある中で、経済的に家族を支えたり、家計管理等の役割を負っている人も少なくない。子ども時代は多忙な親に十分面倒をみてもらえなかった、自らに子どもが生まれても子育てしながら三世代を支えなければならない、など重い負担がみられる。

特に、外国人の母親が日本人の父親との離婚や死別によりシングルマザーになった場合は負担が大きい。

●親の通訳をする役割

- ・（呼び寄せられて）来日した時、両親から日本語の習得を期待されたことは、不公平だと感じていた。父は長年日本にいても日本語ができないが、私たちは若いからと来日して2～3年で流暢になると思っていた。どこかに行った時など、親が私たちに日本語で交渉するよう頼んできたが、あまり話せなかったので辛かった。思春期ということもあり、親との関係はずっとギクシャクしていた。
- ・最近、親が年金の手続きに出かけたが、役所の窓口で英語が通じなかったので、授業中の妹を電話で呼び出して通訳してもらった。妹はかなり嫌だったと思う。病気になった時は、英語ができる医師がいる病院に通っている。最近父が胃腸系の疾患で別の病院に入院しましたが医師が英語を話せなかったため、妹が電話で通訳した。
- ・病院や役所で通訳をしなければならないのはとても大変。母の母語を私は忘れかけていて、通訳するにも分からない言葉がある。母が病院に行く時は、私が母の症状を紙に書いて母に渡す。役所から母の通訳として来るように言われることもある。遠方だったり、時間のない時もあり、とても不便。
- ・両親は永住権を持っているが、いずれも日本語が得意ではなく、漢字がわからない。妹や弟が小児科に行く時は、私がいつも一緒にいて通訳をさせられた。

●家族を支える役割

- ・賃貸住宅で夫と子ども、母ときょうだいの2世帯7人で暮らしている。妹、弟も働いており、それぞれ毎月5万円ずつ家に入れ、私がか計を管理している。母は工場で働いているが、病気があり無理できない。どうしてもやりくりできない月は夫の給与から多めに支出してもらっている。
- ・シングルマザーとして子どもと両親と4人で暮らしている。子どもが1～2歳の時からアルバイトを始めた。昨年、父が病気で倒れ、働けなくなった。今は私がか計を管理している。お金の使い方を考えたり、毎月の収支を合わせたり。母は日本語が得意でなく、父の入院手続きなどすべて私がやらなければならなかった。両親を支えていかなければ、それが負担になっていると精神科の先生からは言われている。
- ・母と二人暮らし。今でも進学はあきらめていないが、失業した母を支えるためにも週6日

働いている。

- ・母国の短大を卒業すると、母から「戻って手伝ってほしい」と連絡があり、日本に帰ることにした。母は 2 年前に父と離婚して、経済的にも精神的にも心細かったのかもしれない。妹と弟が反抗期で母の言うことは聞かないが、私の言うことは聞くという感じがあり。
- ・私には年の離れた妹と弟がいる。母は私以上に日本語が不得意なので、妹や弟のお迎えや連絡等は私がやるが多かった。

●親に面倒をみてもらえなかった子ども時代

- ・親が忙しすぎていつも家にいない、子どもの世話ができない家族も多い。家に帰っても誰もいないし、ご飯も用意してもらってなかった友だちがいる。
- ・両親は料理店を経営。昼夜を問わず働き、私はいつも店にいて近所のアイドルだったが、食事を作ってもらった記憶がない。
- ・受験の時、母は自国の正月のため、友人に娘の面倒をみるよう頼んで帰国してしまい、重要な決定を一人でしなければならず、大変な思いをした。

●ひとり親になった外国人母に育てられて

- ・母は私が小 1 の頃、日本人の父と離婚した。それからは母一人に育てられた。離婚した時、母はどうして母国に帰らなかったか聞いたことがある。そうしたら母は「フィリピンのほうが学費などは安く済むかもしれないけれど、勉強する環境は日本のほうが整っている。だから日本を選んだ。」と話してくれた。
- ・母には大学に行くように言われ、アルバイトもしたことがなかった。しかし、最終的に進学は断念し、進路未定で卒業となった。奨学金は、母が「あとで借金になるから借りないほうがいい」と言うのであきらめた。父にも遠慮して学費を頼むことはしなかった。母は大学に行っていっていいと言ってくれたが、家計の事情を考えると行きたいとは言えなかった。
- ・両親の離婚後、「新しい家族がいてお父さんも大変」と、母は養育費を決めなかった。
- ・私に自信と誇りを与えてくれた父は、私が中学 1 年になる時、病気で亡くなった。父が亡くなった話はあまりしない。母子家庭になって「かわいそう」「大変だね」と言われるから。「お母さんを助けてあげて、支えてあげてね」とも言われる。母子家庭と言われ、両親が離婚した家庭とひとつでくらわれるのもつらい。

(7) 日本人の視線とメンタルヘルスへの影響

日本人の歴史認識の薄さや無関心に直面して傷つくことが多い。それは個々に解決できる問題でもなく、同世代同士で話すのも申し訳ないような気がして黙ってしまう、と語られている。

●見えない圧

- ・国際的な環境で育ってきたので、日本はまだ島国だと感じることもある。私自身はいじめや差別を経験したことはないが、SNS でハーフや外国籍の子どもたちがいじめに遭っている事実を知り、大きなショックを受けた。外国つながりというと、〇〇パブを想起して馬鹿にされるので、ハーフということを隠す友人もいる。
- ・同年代と話していて日本語ができると「ハーフ？」と聞かれる。外国人だと伝えると「ずっといるのになぜ日本国籍にしないの？」と言われて閉口する。(自分の国は母国であると)日本人の前では言いにくい。自国人として誇りを持っていることなどはとても言いづらい。
- ・歴史の授業で、自分が知る歴史とは違うことを言われるのがつらい。自国では侵略者として扱われている歴史上の人物が日本では英雄。自分のアイデンティティは自国にあるとしても日本に悪感情があるわけではなく、どちらも理解できるが、どちらにも合わせるのには難しい。(中略)日本と母国の学生交流団体に入ったことがあるが、日本人の学生は、慰安婦のことなどはほとんど知らないのだからこちらが言及するのが申し訳ないと感じた。
- ・スポーツ観戦で「どっちを応援するの？」と友だちに聞かれて「私は自国を応援」と言うと「えー？」と反応される。私にとっては当たり前なのに、日本を応援することを強要されているように感じる。また「日本が勝って嬉しい」と言われても、私は自国が負けて悲しいので共感できない。それが言いにくく、共感を強制されているように感じる。その雰囲気からしてつらい。

●ハイトスピーチ

- ・駅前でハイトスピーチをする人たちと反対派がもめることがあるが、自分が議論の中心にいるようで怖い。外国人だと気づかれないようにその場を離れる。暮らしづらい、生きづらい。
- ・日章旗を掲げて大音量を出す街宣車は、日本人の友だちと歩いていても怖い。そう伝えたが「うるさいだけじゃない？」と言われ、言っても無駄だと余計傷ついた。このことは親と同国人の友人にしか話せない。言論の自由と言うけれど、傷つく人、怖い思いをする外国人のことも考えてほしい。
- ・ハイトスピーチに反対する人たちとも距離があると感じている。そういう運動に参加するには犠牲にするものが大きすぎると感じる。

(8) 家計の苦しさやコロナ禍の影響

進学や就職には、家庭の経済的な事情も大きくかかわっている。コロナ禍の経済悪化により仕事が減った、仕事に就けなかった状況もみられ、家計の苦しさは増している。特に外国人の母がひとり親となった家庭への影響は大きい。

●家計の苦しさの影響

- ・アメリカに留学して資格も取った。学費が尽きて1年で日本に戻り、就職活動をしようとしたが、日本では中退とみなされ高卒になると言われ、5か月間アルバイトし、その後日本の専門学校に行った。
- ・母には大学に行くように言われ、アルバイトもしたことがなかった。しかし、最終的に進学は断念し、進路未定で卒業となった。奨学金は、母が「あとで借金になるから借りないほうがいい」と言うのであきらめた。父にも遠慮して学費を頼むことはしなかった。母は大学に行っていっていいと言ってくれたが、家計の事情を考えると行きたいとは言えなかった。
- ・外国人の親は日本語ができないと労力を使う仕事しかないし、賃金が低いから家にいたくてもたくさん働かなくてはならないというつらさがある。

●コロナ禍による就職への影響

- ・大学で医療系を学んだ。卒業がコロナのまん延時期と重なってしまった。持病があり、主治医からワクチン接種の回避を勧められたため、病院への就職はあきらめた。病院に就職する同級生が多かったが、私は整体院で働くことになった。
- ・留学して得た専門を活かして就活したが、コロナ禍で内定取り消しになった。もう1つの会社も取り消しになった。大きなショックで体調が悪くなり病院に行ったところ、精神科の受診を勧められ、受診を続けている。現在は就職先を探しながら、小売店でアルバイトをしている。
- ・コンビニで働いている。時給は1100円。週6日、14時半から23時半ごろまで働いている。次の仕事を探すためのつなぎと考えていたが、コロナ禍で希望する接客業の求人はほとんどない。もっと賃金のいい仕事をしたいと思いながら、見つけれない。
- ・母はコロナ禍でシフトに入れなくなり、半年ほどで仕事を辞めざるを得なくなった。その後食品工場の派遣の仕事をしたが、契約が満了すると次の更新は受けられず、1年ほど失業している。

2 解決に向けて必要なこと

(1) 日本語学習や進学へのサポート

学校の国際教室、各区国際交流ラウンジ、地域の日本語教室があり、教師や学習支援ボランティアの指導は、進路選択の可能性を広げる大きな役割を担っている。が、情報面、精神面でのサポートは不足している。

外国人の増加に伴い日本語学習のニーズも増加しているが、一方で学習支援ボランティアの減少がみられるなど、きめ細かなサポートが難しくなっており、支援体制の拡充が求められている。社会人になっても、更にオンライン学習など働きながら学べる環境を求める声もあった。

●教師や日本語学習支援者が支え

- ・編入した市立中学は外国につながる生徒が多く、わからないことがあれば同国人の級友に尋ねたり、通訳してもらって助かった。国際教室で日本語を習った。学校から親へのプリントは、国際教室の先生が中国語に訳してくれた。外国人が多い分、色々な配慮があったと思う。国際交流ラウンジにも週1日通った。残念だったのは、日本人のクラスメイトと話したり、友だちになったりする機会が少なかったこと。
- ・自分らしさを取り戻すため別の中学に行きたいと相談したところ、先生から教師に中高一貫校を勧められた。小論文を居残りで教えていただいた。
- ・高校では外国人のための日本語の特別授業があり、担当の先生が「外国人だからできるのはここまで」とは言わずに「頑張ったらこういう道もある」と道を提示してくださり、希望を与えられた。
- ・日本語学習支援のボランティア教師の誘いでクラスを手伝いながら日本語指導を受けた。その甲斐あり公立の短大に進学できた。短大時代も日本語指導を受けた。シングルマザー世帯の授業料免除制度もボランティア教師が調べてくれた。

●ニーズに合わせた支援体制の強化が必要

- ・地域の日本語教室に通ったが、参加者が多く会話の機会は少なかった。
- ・20歳で2年制の専門学校に入学したが、勉強についていくことは大変で、地域日本語教室のボランティアの先生にたくさん手伝ってもらった。この方は中学の国際教室の先生でもあった。日本語を教えてくれる人を探して役所の教育委員会で尋ねたら、この団体を紹介してくださった。
- ・大学卒業後日本に帰って来た時、漢字をほとんど忘れていることに気づき、勉強をし直した。今は日本語能力試験N3受験のために勉強している。もっと日本語を勉強しようと思うが、仕事をしているのであまり時間がない。日本語のオンラインレッスンを役所などが提供してくれればと思う。

●生活が安定する仕事に就けるように

- ・家計の事情で進学を断念したが、あきらめていない。これからでも大学、短大、専門学校に行きたい。
- ・（留学してビジネススクールで学んだが、日本語能力がネックとなり就職が決まらず）ハローワークのビジネス日本語クラスや、ボランティアのビジネス日本語クラスに通い、履歴書の書き方などを覚え、英語学校に就職した。将来は大学で英語を教えたい。大学院で学位を取る必要を感じている。そのため貯金と日本語学習が必要と思っている。
- ・以前から医療や介護の仕事に興味があったが、自分には無理だとあきらめていた。でも介護の仕事を始めた友人から、介護ならば資格がなくても始められると聞き、介護施設での仕事を始めた。収入は夜の仕事の 5 分の 1 に減ったが未練はなく、お年寄りの話を聞くことが大好きだったので、仕事は充実していてとても楽しかった。天職と思った。身体を壊して退職し、今は飲食店で働いているが、心身の状態を安定させ、いずれは介護職に戻りたい。
- ・コロナ禍で内定取消となり体調不良。小売店でアルバイトをしているが、早く母を楽にさせてあげたい。就職に備えて TOEIC の勉強中。母国と日本の懸け橋になるような仕事がしたい。

(2) 多言語での通訳・翻訳が必要

生活に必要な情報の多言語化や通訳、翻訳は、日本語が不十分な家族の通訳としての役割を負う子どもたちを、負担から解放することにもなる。特に、役所や病院で安定的に通訳、翻訳が得られる環境が望まれている。

●役所や病院には通訳を置いてほしい

- ・役所では通訳のボランティアを頼むことができるが、いつも頼めるわけではない。
- ・役所に英語が通じる職員が少ないことで苦労することが多い。公的な翻訳ボランティアを利用することもできるが、個人情報の観点から重要書類の翻訳は頼めない。母の友人は雇用契約書や婚姻届なども断られた。私的な文書も翻訳してもらえない。役所から母の通訳として来るように言われることもあるが、私にも都合があるし、とても不便。役所では外国人の人も増えているので、役所や病院で簡単でも通訳ができる人が増えてほしい。
- ・母は教育委員会で働いている先生に大変お世話になっている。英語もスペイン語も話せる人なので、母は何かあるとその先生にお願いしている。この人が退職してしまったらどうなるのかと心配する。役所や病院の窓口に、いろいろな言語が話せる人をおいてほしい。
- ・健康保険などの基本的なサービスについての説明の翻訳もほしい。

(3) 通訳や日本語学習のサービスは「仕事」に

通訳ボランティアでは、外国人女性も活躍し、利用者の「生活と精神の安定に貢献」しているが、収入が不安定な中で交通費程度の報酬は厳しく、仕事として携われるようになることが望まれている。また、日本語を教える日本人についても、ボランティアだけに頼ることには限界がある、という指摘もみられる。

●通訳・翻訳は安定したサービスとして共有されるべき

- ・母は国際交流ラウンジなどで通訳ボランティアを務めてきたが報酬は交通費程度。外国人親子の生活と精神の安定に貢献している。仕事であるとよい。
- ・どこの学校の生徒も学びに来られたが、今は人数の関係で限られた学校から、その中でも選ばれた子どもたちしか来られないと聞く。理由は外国人が増えて学びたい生徒が以前より多いのとは逆に、日本語ボランティアが減っており、手が足りないから。これでは以前のようなきめ細かい支援は受けられないだろうと思う。ボランティアだけに頼ることには限界がある。
- ・私が子どもの頃は外国人が少なく、今より手厚いサポートが得られた。国際交流ラウンジはどこの学校の生徒も学びに来られたが、今は人数の関係で限られた学校から、その中でも選ばれた子どもたちしか来られないと聞く。理由は外国人が増えて学びたい生徒が以前より多いのとは逆に、日本語ボランティアが減っており、手が足りないから。これでは以前のようなきめ細かい支援は受けられないだろうと思う。

(4) 相談の場

思春期で来日した子どもたちの学習以外の不安や悩み、社会人になってからの就学や就職の希望など、外国につながる子どもや若者には、どこに相談したらいいかわからない状況がみられる。話を聞いてもらったり、相談できる場所があるとよいとの希望が語られている。

目的に応じた相談窓口とともに、地域に「居場所」をつくることで困りごとを聞けるような環境づくりの必要性、さらに第二世代の自分も学習支援ボランティア等に助けられたので、今度は自分が支援する側になりたい、という意向が語られている。

●相談の場が確保される必要がある

- ・日本語の先生やボランティアの方々は、学習支援には熱心だったが、話題は勉強のことで生活や友人関係などについては尋ねられたことがないし、話せる雰囲気もなかった。
- ・一度は諦めた大学進学だが、いつか必ず進学したいという思いはもっているが、どこに相談していいのかわからない。
- ・高校時代の同国人の友だちはフリーターが多く、代り映えのない毎日で、人生を変えたいけれどもどうしていいかわからない、どこに相談してよいか情報もないと言う。
- ・彼女が中学生で妊娠していた頃、本人から話しかけられたが、話を聞き出す機会を逸した

まま会えなくなって悔やまれた。外国つながりの子どもたちの居場所づくりをしているのは、この経験から。今は彼女の子どもが居場所に通っている。

- ・子どものことは療育センターのソーシャルワーカーに相談する。知り合いに子どもの心配があれば療育センターを紹介するなど手伝いたい。自分も支援者に助けられたので。

(5) 若者・当事者主体の場づくり

自らの経験を活かして、外国につながる子どもたちを支援したい、居場所をつくりたいという積極的な意向がみられる。支援の場が、自らの居場所でもあり、成長の機会になっているとの実感もみられる。この意向を力としていくための場づくりが望まれる。

●後輩たちに自らの経験を伝え、支えたい

- ・学生ボランティアをしていた時期に、生徒たちに「先輩、どうやって高校に入ったんですか?」「どうやってそこまで日本語が話せるようになったんですか?」と言われ、すごく頑張ってきたんだと自分で初めて思うことができ、かつ人の役にも立てるようになって、頑張ってきてよかったと思った。
- ・自分だけで頑張ってきたが、誰かいたらもっとたくさんの情報が得られる。「なんでもいいから話を聞くよ」「どんなことでも話してね」と言ってくれるだけで心の支えになる。日本語学習支援では、後輩の子どもたちに、友人関係や困ったことがないか、勉強以外の話を聞くようにしている。ビザ申請の苦労なども伝えたい。相談できる相手になりたい。子どもたちに会いに行くことで、自分の息抜きの場にもなっている。
- ・大学で日本語教育を専攻し、実際に日本語を教える経験を積むため、中学生の時に放課後に通っていた国際交流ラウンジの学習支援教室でボランティアのサポーターとして中学生に日本語や教科を教えた。それがきっかけで、日本語教育といっても自分と関わりのある後輩や子どもたちのためにできることをしたい、それは自分にしかできないことだという思いができた。
- ・差別的な発言をされることもあるが、それは国籍の問題ではなくその人自身の問題。多様なバックグラウンドを持つ人がいるということを知ってもらうことが大切だと感じ、国際交流ラウンジで学習支援を受けた卒業生同士で居場所をつくり、後輩たちに何ができるかを模索している。外国人としてではなく、一人の人間としてやりたいことを見つけて自分が納得できる人生を皆にも過ごしてほしいと思う。
- ・私がした苦労を後輩にさせたくない。日本語学習支援ではビザ更新手続きに関して後輩たちに情報共有するようにしている。何か月も前から準備するんだよ、など。

(6) 学校や地域社会による包摂

学校や、地域社会が外国につながる人をもっと包摂することが求められている。国の歴史観の違いを乗り越え、個や友人として気持ちを聞いてもらったり、分かち合える関係や場が求められる。

●学校による包摂

- ・母国語を誤解された生徒たちが日本人生徒にいじめられ、日本語がわからないことに自信が持てなかった頃、担任の先生がみんなの前で「この子たちは自分がいたいからここにいらるわけではなく、親の都合でいるんだ」と話してくれて救われた。
- ・日本と母国との関係、日本と母国での歴史観の違い、外国人の感情を日本の若者は知らない。「昔は仕方なかった」と片付ける日本人が多い。小学校で国際理解教育が進むとよい。

●地域による包摂

- ・地域のイベントでお年寄りに「ジュースが余ったから持っていきな」などと言われると、日本人というより地域のおじいちゃん、同じ人間だと思えるようになった。
- ・店の客から「娘が成人しても若いから第2の人生を歩める」と言われ、同世代と比べて焦らなくてもいいと思えるようになった。
- ・隣人から「ごめんね」と言われたことがある。慰安婦問題のこと。政治問題と言うより個人レベルでこんな話を普通にできたらよい。
- ・子どもの入学に必要なものなど、母は地区センターやボランティアの人などに聞いた。周りの人に助けられて子育てした。
- ・小中学生のうちは学校を通じて地域の人と知り合う機会があるが、就職するとまったくない。そういう場所があるとよいと思う。外国人支援も、学校につながっている間はいいいけれど、そこから出ると難しくなる。日本人と外国人が交流する場がもっとあるとよい。文化や食生活に慣れるのも時間がかかる。地域の特産物や歴史などを知らないので、そういうものを紹介してくれて地域の方と触れ合える機会があったらいいなと感じている。

第3章 見えてきた課題と今後に向けて

1 インタビューを終えて

(1) 全体を通しての所感

11人のそれぞれの語りから私たち聴き手が感じたことは果てしなく、山のようにあった。

インタビュアーを務めた飯島裕子さんは次のように所感を述べている。

「いろいろな方がいらっしゃり、まとめるのには困難も感じます。特に困りごとについては個別性があり、共通ではないものが多くあるという印象を受けました。たとえば、教育ローンで学生支援機構の奨学金は親に永住権があるなど、安定したステータスの場合は借りられますが、そうでない場合は対象にすらなりません。私が最も印象深かったのは、在留資格の不安定さでした。人権を無視したような入管の対応や、ビザ取得の基準（種類や年限など）について合理的な説明ができないような線引などをインタビューからあらためて感じ、疑問を感じました。十数年日本に住み、育ったのに、（1年更新のビザしか取得できず、）来年この国にいられるかどうか分からないような状況には憤りを覚えます。

インタビュー全体を振り返ると、多くの方がとても明るくしっかり自分を持っている、魅力的な方たちだったと感じています。こちらのほうが勇気づけられ、エネルギーをもらえたような気がします。もちろん大変なこともいろいろあると思いますけれど、支援が必要な人という枠にくくるのではなく、ポジティブなエネルギーから学ぶところがたくさんあるし、日本の若い女性たちと一緒に何かやっていたら、お互いに相乗効果が生まれるのではないかとも思いました。」

「支援が必要な人という枠にくくるのではなく、ポジティブなエネルギーから学べる」という見方には私たちも大いに共感する。そこで、ポジティブなエネルギーが感じられた点を「ストレングス(強み)」として、いっぽうで大変なことを「困りごと・壁」として以下に列挙する。

【彼女たちのストレングス(強み)】

- ・人並み以上にがんばってきたタフさ
- ・もともとの能力、体力、精神力、持久力
- ・国境を越えて広い目で世界を見ており、グローバルな視野で日本社会をも対象化していること

- ・ 学習支援団体等からサポートを受ける受援力
- ・ 「次は自分もサポートする側になりたい」という心意気と行動力
- ・ 家族思いのマインド
- ・ 人を魅きつける力とホスピタリティ
- ・ 親の離婚・再婚等をのりこえていくレジリエンス
- ・ 日本社会に期待を感じられなくとも、自力で道を切り開いていく自立心
- ・ 同じ当事者のなかまでグループを立ち上げ、後輩を助ける場を作っていること

【彼女たちの困りごと・壁】

- ・ (中途来日の場合)日本語がわからず、ここに存在すること自体への不安
- ・ 入国管理局でのビザ(更新)をめぐる不便と煩雑さ
- ・ 不安定な在留資格とそれによる労働時間等の制限、低賃金
- ・ 安定した仕事に就けないこと
- ・ 親の生計が不安定、長時間労働で自宅に不在がちであること
- ・ 進学しづらさ、教育ローンの負債
- ・ 役所や病院で(親が)日本語でやり取りできず、サポート役にならざるをえないこと
- ・ 生活のサポート情報が届かないこと
- ・ 家が借りにくいこと
- ・ 「外国人はきらい」と言われること
- ・ 困りごとを相談できない・しないこと
- ・ 中学生で出産後、復学時に教室に入れてもらえなかったこと
- ・ 祖母・母から見合結婚プレッシャーを受けること

(2) レポートからこぼれ落ちたこと

各人のレポートには盛り込めなかったが、こんなことも語られていた。

「友だちにもこのインタビューを受けたいよとすすめたけれど、断られた」。

今回語ってくれた女性は特別に恵まれた人たちだったのだろうか。必ずしもそうではなくて、紹介者である日本人支援者・団体との関係のなかで、これまで話を聴いてくれるという安心な場や経験を持っていたからではないだろうか。そのような経験もなく、安心できる聴き手がいなければ自己を開示することはまずないであろう。初対面の私たちに対して本当によく語ってくださったし、一部分ではあるかもしれないが、彼女たちの貴重なライフヒストリーを今回ここに収載させていただいた。

2 本調査で見えてきたこと

(1) 私たちが新たに認識したこと

今回、外国につながる第二世代の女性たちから生の語りを聞くことで、改めて認識したことは以下の3点である。

1点目は、横浜にすでに10万人の外国人が身近に住んでおり、「多文化共生」という言葉が使われるようになって久しいものの、あまり当事者と出会うことも関わることもなく、私たちは仕事や生活をしてきたということである。それによって、無意識に差別しているかもしれず、第二世代の若年女性の存在に気付いたとしても、関わる機会をつくれなかったことが女性の生きづらさや、相談しづらさにつながっていたのかもしれない。そういった意味では、日本に移住し、生活をしている女性たち自身やルーツである国の歴史を知り、関わる土台を築くことが私たちの側にまず必要であると感じた。

その土台ができて初めて彼女たちに、こんなふうに暮らしたい、生きていきたいと話してもらうことができるだろう。そういった意味では、いまようやくスタートラインに立ったばかりである。

2点目は、第二世代ともなれば、外国籍ではなく日本国籍を持っている人が約半数に上っていた事実への認識である。このことは、横浜に移住後の時間の推移を示している。彼女らは国籍上外国人ではないため、より生きづらさは見えにくい。一方でグローバルな視点を持ち合わせている人もおり、その強味も知ることができた。

3点目は、今回次ページの検討委員の意見にもあるように、第二世代の若い女性を対象としたことで、マイノリティである彼女たちのこれまでの生活経験に焦点をあて、当事者が言語化してくれたことで、彼女たちの視座に立って、私たちが課題をとらえなおすという作業を行えたことである。この報告書をまとめる作業を通じて、11人の女性たちのこれまでの生活の軌跡を互いに知ること、自身を俯瞰し、他者とつながるきっかけができるかもしれない。

インタビューアーの飯島裕子氏の力を借りながら、女性たちが当事者の声を聴き、それを伝えていくことに男女共同参画センターが深く関わることは、あらためて意味があるのではないかと考えた。

(2) 調査結果についての検討委員意見

2021 年 12 月、インタビューレポートをもとに開催した検討会では、調査結果について検討委員から次のような意見が寄せられた。

- ・ジェンダー視点をもってインタビューが行われたと思うが、結果はそれ以前の見えない水面下に存在することごとをすくい取ったというところではないか。

- ・日本語の壁を抱える親や本人には通訳や翻訳、学習等の支援が必要で、それらが女性を主とするボランティアで賄われていることはたいへん不十分である。通訳や翻訳、学習支援等の仕事はボランティアではなく有償の仕事とすべきこと。そのための予算を付けること。これは外国人受け入れをさらに進めるにあたって、早急に必要なことだろう。

- ・(外国につながる人々の支援や調査研究にかかわる身としては)このインタビューで語られていることごとはこれまでも再三聞かれたことであり、特段驚くようなことではなかった。しかし、第二世代の若い女性にフォーカスしたという点ではこのような調査は初めてであり、意義のあるものと考ええる。

- ・今後、母と娘という二世代にわたる時間軸を立てた調査もできるといい。90 年代に来日した母の世代はどうだったのか、娘はどうなっているのか、など。この調査に続く横浜市の調査や取組に期待している。

- ・(日頃外国につながる若者たちと付き合う立場からは)たいへんな強さがあるという話だが、“強いと言われたくない”という当事者もいる。自立心の裏に孤独がある。そのことを理解してほしい。解決のためにも、本人たちが元気になれる「居場所」が大切。

- ・日本で生まれ育った人と、思春期に途中で呼び寄せられた人とはまた事情がちがう。とくに後者では、10 代の子どもなら通常は学校や家庭で守られているだろうことが守られていない生活状況に置かれている。その状況に手がさしのべられてほしい。

- ・把握された課題は大きく、多方面にわたり、重い。必要なことの全部を男女共同参画センターでできるわけでもない。しかし、地域社会における課題をわかりやすく発信し、ジェンダーの問題にも留意しながら課題の共有を進めていくことはできるのではないか。それが次のアクションにつながるのではないか。

(3) 日本社会に求められていること

これまで述べてきたところから、私たちがいま日本社会に求められていると考えたことを以下の図のように整理した。

▶ヘイトスピーチに代表される差別的な排外主義、偏見、歴史への無知の払しょく

▶在留資格取得や手続きの負担軽減及び人権視点に立った入国管理局の対応

▶行政の手続きや生活サポート情報を確実に、わかりやすく届けること

▶就学や就業の機会を拡大すること

▶医療通訳や行政通訳・翻訳を多言語で必要な際に必ず提供すること

▶通訳・翻訳者等の支援に関わる仕事は、経験の豊かな当事者(登用)を含め、有償の仕事とすること

▶身近で相談できる人や場所、居場所が当事者の望む方向でつくられること

▶中途来日の児童・生徒への日本語・学習・メンタル・生活を支える学校のしくみづくり

3 今後に向けて～私たちにできること

前ページ 1-(3)で整理したようなことを進めていくために、社会的な環境整備、公共の場の提供、活動支援、発信等を当事者の望む形で、ともに行うのが、私たち公共施設の役割ではないだろうか。それは前項 1-(2)で検討委員が述べている「地域社会における課題をわかりやすく発信し、課題の共有を進めていくこと。それが次のアクションにつながるのではないか。」という意見とも符合する。

インタビューの中で「“闘いの場” から“生活の場” へ(変わってきた)」とAさんが語っている。生活の中で地域の人々とともに過ごす場、ただそこに居ていい場があることは望ましいことだ。支援者と呼ばれる人に支援を任せるのではなく、地域で日常生活を共にする私たちにも、個人としてもっとできることがあるかもしれない。そのような一歩踏み込んだかわりが求められている。

たとえば、現在、公益財団法人横浜市国際交流協会が運営する「なか国際交流ラウンジ」にて、当事者による活動（レインボースペース）が行われており、このような活動と連携していくこともできるだろう。

ただ、そのようなかわりは、当事者が安心できる居場所(自助活動と発信を同時に行えるような場)が保証されて初めて、次の段階として地域の人々との交流が可能になるのではないだろうか。その意味で、当事者の場づくりと発信を支える環境整備はどちらも必要不可欠なことである。

前述したとおり、私たちの取組はまだスタートラインに立ったばかりである。これまでこの分野を切り拓いてこられた活動団体に敬意を表し、さらに学んでいきたい。また、さまざまな関係機関と連携していきたい。

当センターの具体的な取組としては、これから 2022 年度に本調査のインタビュー当事者、支援団体に調査結果を報告する報告会を開催する。これをきっかけとして、外国につながる二世世代の若年女性らの生活課題や要望を、支援団体や当事者と協働で発信するような場をつくることを考えている。ひきつづき、本調査を通じて考えた取組を今後一つひとつ着実に進めていきたい。

資料

参考文献

① 自治体による調査報告書

- ・横浜市市民局女性計画推進室(1997)『横浜市外国人女性の生活実態調査 報告書』
- ・横浜市国際局(2020)『令和元年度 横浜市外国人意識調査 調査結果報告書』
- ・川崎市市民文化局市民生活部多文化共生推進課(2016)
『川崎市外国人市民意識実態調査(インタビュー調査) 報告書』

② 企業・民間団体(公益財団法人等を含む)によるレポート等

- ・公益財団法人横浜市国際交流協会(YOKE)(2018)
『南区・外国人インタビュー調査結果報告書』
- ・海老原周子(2021)『外国ルーツの若者と歩いた10年』公益財団法人東京都歴史文化財団
アーツカウンシル東京
- ・高谷幸(2020.10)「共感と想像力のあわいで」『We learn』pp.3 公益財団法人日本女性学習財団

③ 研究者による論文等

- ・長谷部美佳(2011)「地域社会と外国人住民の“つながり方”～ジェンダーに注目して～」
『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』No.12 pp.50-59 東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター
- ・稲原美苗(2020)「なぜ今、フェミニスト現象学なのか?展開と挑戦」『フェミニスト現象学入門—経験から「普通」を問い直す』pp.90-100 ナカニシヤ出版

外国人女性 インタビューの流れ [質問項目]

0 男女共同参画センターについて

- センターのことを知っているか？
○これまでにセンターに来られた経験
○横浜の公共施設を利用したことはあるか？利用したことがない場合、その理由

1 ご自身について

- [illegible]

2 現在のくらし・家計の状況

- 同居する家族との関係について(現在～過去)
- 家計の状況・負担割合について
(家計の状況は苦しいと感じるか／家族等と同居している場合は、負担割合)
- ご自身で自由に使えるお金はいくらぐらいか？
- 貯蓄の有無(自身・世帯で)
- 現在の生活で、特に困っていること、悩んでいること
- 相談できる人・場所
- 現在の生活全体についての満足度

- 大事にしていること
- 日本や、自分の生まれた国を好きか？

3 現在の健康状態

- 現在の体調(眠れているか)
- 医療機関等の利用状況・健康診断の受診状況
- 具合が悪いとき、どうしているか？
病院に通う場合は、どんな病院に通っているか？
- 具合が悪いが病院に行かないよう言われた、または行けなかったことは あるか？どんな理由で行けなかったか？

4 現在の仕事について

- 仕事の有無(あり・なし)
- 【仕事をしていない場合】
- 現在の状況及び これまでの仕事について
- 【仕事をしている場合】
- どんな仕事をしているか？ してきたか？
- 就業形態(契約社員、派遣社員、パート・アルバイト、その他)
- 1日の労働時間、1週間(あるいは月)の勤務日数
- (差し支えなければ)収入(税込の月収・年収)
- 現在のしごとについて、総合的な満足度、思うこと
- 今やっている仕事のやり方をどう思うか？
- 自分の意見を提案できる環境か？
- どうしたら仕事で自分のルーツを活かせると思うか？
- 職場の人とのやりとりで困ったことはどんなことか？
- 新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、仕事に変化があったか？

5 これまでのライフヒストリーについて

- 支援機関(具体的な名前)とつながったきっかけ
- 支援機関(具体的な名前)には、いつ頃どのくらい通っていたか？
- 支援機関(具体的な名前)では、どんな支援をしてもらったか？(日本語、勉強、その他)
- 親(特に外国人の親、母親)についてどう感じ、どう見てきたか？関係はどうだったか？
- 娘だからと、とくに求められた(期待された)ことはあるか？
- 家事(負担)はどうだったか？
- 家で使う言語は？
- 親に勉強や進学についてどのように言われたか？

- アルバイトはしていたか？
- 地域のイベントなどに参加したことがあるか？
- 近くに家以外の安心できる場所があったか？
- 外国にルーツのある仲間とのつながりがあったか？
- 進学、就職、結婚といったライフイベント時に、支えとなったもの、人は？
- 将来をどんな風に考えていたか？
- 差別を感じたことはあるか？(いつ、どのような)
- 好きなこと、取り組んでいること
- どんな時に幸せを感じるか？

| | |---------| | 6 将来の希望 | |---------|

- 将来、どんな夢や希望があるか？ 将来どんな風になりたいか？
- どのようなサポートがあると嬉しいか。
たとえば、男女共同参画センターでやっていたらいいと思うこと…
- 日本人にもっとこうして欲しい、地域社会がもっとこうだったらいいと思うことはあるか？

横浜市外国人女性 生活状況インタビュー調査にあたって

調査団体：公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会

調査時期：2021 年 6 月～11 月

調査場所：横浜市男女共同参画センターほか

目的： 横浜市で外国籍市民が 10 万人をこえて増えつつける中、横浜市男女共同参画センターでは外国につながる女性が住みやすい地域社会をつくるため、インタビューを行います。今回、横浜市に 10 年以上住み、両親あるいはどちらかの親が外国人である(第 2 世代の)20 代 30 代女性にお願いしています。
暮らしの状況やご希望、必要な情報やサポートがとどいているか等をお聞きし、今後の役立つサポートやプログラムづくりに生かしていきます。
つきましては、次の条件でインタビューをお受けいただきたくお願いします。

調査結果：お聞きした内容については個人が特定できないように記録し、原稿を 1 度確認いただいた後、報告書に掲載いたします。印刷した報告書は支援者等ご希望の方のみに配布し、当協会ホームページでは、短くまとめた概要版のみ公開いたします。

同 意 書

(調査内容とあなたの権利について)

- 1 この調査では、あなたがこれまでに経験されたこと、これから希望することなどをお聞きます。
- 2 答えたくない質問には答えなくてかまいません。
- 3 話された内容は個人が特定されない形にまとめ、報告書に掲載します。話された内容については守秘を守り、調査目的以外に使われることはありません。
- 4 原稿作成のときの確認のために、いったん録音しますが、報告書作成後は必ず消去・廃棄します。

●調査協力者(インタビューを受ける人)

私は 1～4 までを調査員から確かに伝えられ、同意しました。

年 月 日

署名

○調査員

私(調査員)は 1～4 までを調査協力者に確かに伝えました。

年 月 日

署名

外国につながる第二世代の横浜市若年女性 インタビュー調査報告書 【Web 概要版】

年月： 2022 年 3 月

発行： 公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会
男女共同参画センター横浜南
〒232-0006 横浜市南区南太田 1-7-20

Tel： 045-714-5911

E-mail：mkoho@women.city.yokohama.jp